

牧草あって酪農あり

今年、飼料作物栽培計画

安定した酪農は

自給飼料の確保から

「乳は乳牛から搾るのではなくて、土から搾るべきだ」といわれていきます。それは皆さんの酪農経営が楽になるか、ならぬかは、皆さんの土地を上手に利用し、自給飼料を増産するか、しないかにかかっているからです。

自分の土地から安く生産できる自給飼料を、春夏秋冬と順序よく栽培し、計画的に牛に喰べさせると、楽に思う通りに乳をしぼることが出来て、乳価が多少下つても心配がありません。これがほんとうの安定した酪農の姿です。

その自給飼料は、自分の田畑や野草地を上手に利用すれば、いくらでも増産出来るのです。特に田や畑に飼料作物と普通作物を順ぐりにつくる輪作をやつたり、飼料作物を一年間に三回も四回もとる多毛作をやつたり、また遊んでいる野草地を良い牧草に切りかえたり、種々工夫すれば、まだまだ増産することが出来るのです。

乳牛一頭に

どの位の飼料が必要か

乳牛は一日に体重の約一割の自給飼料(粗飼料)をたべます。牛の重さを五〇〇キとしますと一日約五〇キたべるのです。一月一、五〇〇キ、一年で約一八、〇〇〇キの自給飼料が必要です。これを自分の畑や草地からなるべく収量を上げて収穫すれば良いのです。

さて春から秋にかけては、青刈作物を順次青刈して喰べさせたり、牧草に放牧や繋牧をしてあたえたり出来ますが、冬は乾草やエンシレーシ、あるいは根菜などを貯蔵して置いてやらなければなりません。これも夏の間に、必要な分だけ作つておかなければなりません。

自給飼料は何を

どれだけ作ればよいか

いつでも餌が足りなくならないようにタップリと用意するためには、自分の作る自給飼料はいつ収穫出来るか、一反歩からいくらかとれるかを調べて、飼料作物の種類やつくる面積を決めます。すなわち、

① 先ず野草地や水田の畦からどのくらい草がとれるか。田畑の収穫物の残りもの一穀物や野菜の屑、稲藁、大豆稈などの内いくらかを餌として利用出来るか。

② 春は何を何日間たべさせるか。夏は何を何日間あたえるか。秋は、冬はと考えるか。

③ 青刈期間は大体一五日から二〇日間位ですから、毎日五〇キずつ喰べさせると、この青刈期間中いくらの飼料作物を収穫しなければならぬかが判ります。

④ 次にいま決めた飼料作物の反当りの収量を調べると、栽培面積はいくらにするかが決ります。

⑤ 青刈期間の間が切れることがありますから、その間は野草やエンシレーシで補います。

⑥ 冬の分は、日数をかぞえて、冬中に必要

な自給飼料の種類と量をきめ、それぞれの反当り収量を調べて、面積をきめます。良い飼料作物を選び、上手に作ると、反当りの収量があがり、狭い面積でも、間が切れることなく楽に餌をあたえられるのです。一応計算もして見なくてはなりません。

どんな作物をえらぶか、その作物はいつ収穫出来るか、反当り収量はどの位とれるか、収穫の順序はどうなるかは、いろいろな例をあげて、次の頁から書いてありますから、ゆつくり研究して下さい。

計算が苦手で困る人は、最後の頁に乳牛一頭に必要な飼料作物の組合せ種子をのせてありますから御利用下さい。

自給飼料は高蛋白質、

高栄養のものを作ろう

乳牛が飼料を喰べるとその一部は体の健康を保つために使われます。この体を保つために必要な飼料を維持飼料といえます。乳を出すためには、これ以上の飼料養分がある訳で、乳を出すために必要な飼料を産乳飼料といいます。つまり体を保つ分だけでなく、出る乳の量に応じて飼料を増さなければなりません。しかし、牛が一日に喰べることの出来る飼料量には限りがありますから、結局たべる飼料の量と共に、飼料に含まれる栄養成分が大切なこととなるのです。体をつくり、乳を出すのに必要な養分は、水分のほかに、デンプン質、蛋白質、脂肪分、カルシウムなどの鉱物質、ビタミンなどがあり、これ等を適当に含んだものが栄養分の高い飼料ということになります。

特に乳を沢山出すときは、水分や蛋白質、カルシウム分などが特別に必要です。青々とした牧草や青刈飼料は、これ等の養分を沢山含んでいるので、牛の健康のためにも、乳を出すためにも大変良い飼料なのです。

いなわらばかりあたえようと、養分は体を保つ分もありませんから、乳を出すためには沢山の濃厚飼料をやらねばなりません。

ラデノクロバーやルーサンなどのまめ科牧草をあたえますと、体を保つ養分は充分あり、さらに余つた分は乳を出す養分として役立ち、濃厚飼料は少なくて済みます。栄養分の多い良い自給飼料を充分あたえようと、家畜が健康になるばかりか、濃厚飼料の節約にも大いに役立つことを知らなければなりません。

自給飼料作物は

どこになにをつくるか

さて、畑地、水田、園地、山野草地など、どこでも、自給飼料作物は、つくれますが、

酪農家の庭園に

優美な芝生を作りましょう

北海道の酪農家は、牛舎の近くに高いサイロ、母屋の周囲に緑の芝生を配置しており、それがピタリとあいます。

ローングラス（芝草）は元来、放牧草であつた（今も用いられる）ものですが、庭園を美しくする「みどりの芝生」を作ります。

◇ケンタッキー・ブルー・グラス

◇セント・グラス

密播し、刈取つた草は家畜へ与えて下さい。

実際にどのような種類の作物をつくつたら良いのか。

飼料作物を作る場所を、栽培利用の点から分けてみますと、

畑地
青刈類—春から秋の青刈に
根菜類—冬の貯蔵用に
葉菜類—春から秋の青刈に
輪作内の牧草—春から秋の青刈や冬の乾草用に
輪作内の放牧草—春から秋の放牧に

水田
前、後、裏作—早春や晩秋の青刈（青刈、根菜類）や冬の飼料用に
田畑輪換作物（畑地と同様）—春から秋にかけての青刈や採草放牧に
畦畔草—夏から秋への飼料の補充用に

園地
や冬の飼料に、そして園地の緑肥用に
山野—牧草—青刈放牧乾草用に
土地が狭くて、自給飼料を作る場所がないところにいる人はありませんか。こんなに、ドコデモ、つくることが出来るのです。土地を上手に利用するのはこのことです。こんなことは自給飼料作物にかぎり出るので、おまけに、土地も良くなるのですから、こんなにウマイ話はない筈です。

飼料専用園の

多毛作はどうするか

多毛作というのは、一年間に同じ田畑から三回も四回も作物を収穫することです。普通の実取り作物では一回か二回しか出来ない場合でも、飼料作物では青刈すること

が多いので、三回も四回も収穫出来ます。自給飼料作物を専門につくる田畑をきめて、その土地にあう生育の早い飼料作物、あるいは秋播きして冬越し出来る作物、例えば青刈とうもろこし（デントコーン）、青刈ひまわり、青刈えんばく、青刈大豆、ベッチ類、青刈えんどう、レープ、家畜かぶ、イタリアンライグラスなどを選んでまき、早春から晩秋まで五〇日から六〇日位生育させては収穫し、収穫したらすぐ次の作物をまくというようにするのが普通。普通の畑でも、田の一部を輪換畑にしたところでもかまいません。早くとるので、肥料も多い目に、種子も多い目にまきます。ほとんど青刈りしますが、余分のものは乾草やエンシレージとして貯えます。下の図は田畑を利用して、青刈えんばくを主体としたいろいろの自給飼料作物の組合せ例で、どの月にも何かが収穫出来るようになっていきます。そしてひまわり、青刈大豆、えんばくが同じ畑で三毛作となつていて、デントコーン、カブ、イタリアンライグラスもまた三毛作となつているのが分ります。こういうやり方が飼料専用園の多毛作による自給飼料の増産

飼料作物作付の例（燕麦、ベッチ混播を埋草とする場合）

区分	飼料作物名	作付面積	生産目標	利用方法	8月(月)												10 ^a 当り量
					9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7		
田	青刈エンバク ベッチ 混播	5	3,000 (2,400)	埋草		△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6,000
畑	青刈ヒマワリ	2	700	青刈										△	○	○	3,500
	青刈大豆	(2)	600	ク	○										△	○	3,000
	青刈エンバク	(2)	900	ク		△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4,500
畑	青刈デント カ	3	2,250	青刈	○										△		7,500
	イタリアンライグラス	(3) カハ	1,200 900 1,650	根菜 乾草		△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4,000 3,000 5,500
田 畑(転換畑)	青刈甘藷	2	2,250	青刈	○	○								□	○	○	11,000
	C.O(又はケール)	(2)	1,100	ク			□	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5,500
田	ラデノグローバー	3	3,600	放牧	○	○									○	○	12,000
合計		15	17,550														

註 △播種 □移植 ○収穫

方法です。これでやると合計一七、五五〇キの生の飼料がとれます。一日五〇キずつあたえたと三五〇日分もあることが分ります